No.53

芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2－14－3
℡072－681－8870

発行日＊＊＊2011年1月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

夢の最前線

新雪が山全体をおおい、白一色につつまれた朝、凍てついたザックに腕を通し、指先が凍って曲がらないオーバー手袋で何とかピッケルを持ち、カンジキを付けた足を大きく持ち上げ前へ一歩を踏み出す時、何とも言えぬ興奮をおぼえたものだ。高鳴る興奮は私を銀世界の虜にした。処女雪に刻み込む自分の存在の跡……。「僕の前に道はない／僕の後に道は出来る／ああ、自然よ／父よ……」と詠んだ詩人の心と共鳴しているのだろうか。

道なき道を行くとまでは言わないが、自分の判断で道を作るという事は楽しい。胸まで潜る尾根筋のラッセルでは悪戦苦闘を強いられるが、それでも楽しい。白紙の原稿用紙を前にして何を書くか考える。何を書くのも自由であるから余計に戸惑うのである。昨晩寝ながら考えていた事を一気に書き始めるが、すぐに、果たしてこの文でいいのだろうかという迷いが追いかけてくる。躊躇しながらも「これでいいんだ。これしかないんだ」と強い思いで迷いを抑えるのである。書き終わって読み直してみると面白くない。「なんやこんな文しか書けんのか」という思いと「なかなかいい出来だ」という相反した文への評価を巡って、心の中で葛藤が始まる。二、三日後に読み直して「ダメや」と思ったら書き直すが、納得した文が出来ないから悶々とするのである。締め切りの期日が迫りエイヤーと無責任に開き直って活字にしてしまうのだが、刷り上った紙面を見ると苦労も忘れて喜びがわいてくる。

冬山の厳しさは天気次第で変わるが、頑張って登った頂からみる景色は何んとも言いがたい。風や雪に悩まされてやっと頂上にたどり着いたとき、それまでの労苦は消え、言い知れぬ満足感に包まれるから、また登ろうと思い直すのである。「山は登れると思っているうちは登れる」と先輩は言っていたが、確かに山頂への最後の登りのあがきを支えるのは強い意志である。

「芥川だより」を発行していても雪山のそれと似たものを感じる。真っ白な紙面を埋めていく活字に戸惑い躊躇しながら一筋の道を表現することは私にとっては、夢のような表現のフロンティアであり己の最前線であると思える。ただ、山の自然に勝てないように読者の目の怖さを忘れてはいけない。(嘉)

連載　爺捨て山 27

梵店主

毎朝、店先で出会うKさんは八十七歳である。ウォーキングシューズを履き小さなリュックを背負って軽快に歩く姿は若々しい。若い時から山登りが好きで今に至るまで登り続けておられる。特に富士山が好きで百回以上も登頂をされている凄い御仁である。

富士山の山頂には七十歳以上の登山者が記帳するところがあって、後日その年の登頂者名簿を送ってくるらしい。それによると九十二歳の人もいるとか。

Kさんも四年前までは、奥さんの介護をされていて、その間山登りが出来ず筋力が衰えてしまったが、お亡くなりになった後、家に居ても面白くないから山登りを再開され、富士山をはじめ遠くトルコにあるアララット山などを精力的に登っておられる。

毎日、三十五キロ歩く事を日課とされ、米寿を迎える夏には、記念イベントとして大阪・天保山から歩いて富士山を登る計画を、二週間で踏破する予定とお聞きし、私は驚いた。とても私はKさんのマネは出来ない。死ぬ時は冬の比良・武奈ヶ岳の雪原で独り眠るようにあの世に逝けたら最高だと言われる。Kさんは昔から冬山をひとりで登るのが好きだったので、そのように思われるのだろう。百歳になっても元気で山登りをされそうに見える。

連載小説◆負けるな！よっちゃん 48

《ヒマラヤへの道 15》

ガルムッシュ峰 7

梵店主

五千七百㍍のキャンプから上部は岩と氷がミックスした稜線が続くと予想したが、実際はどうなっているか分からなかった。皆目見当がつかなかったので、よっちゃんは不安であった。

実は、よっちゃんは岩登りも氷壁を登るのも得意ではなかったのだ。岩登りを始める時には滑落したらどうなるだろうか。ザイルが切れたらどこまでおちるだろうか。そんな怖しい恐怖感にさいなまれていた。氷の壁を登る時には更に怖しい妄想が頭をよぎった。岩に打ち込むハーケンと違って氷に打ち込むアイスハーケンはいかにも頼りなく、氷がわれたりすればすぐに抜けてしまいそうで心配をしていた。

そんな訳で、ルート工作できた後を荷揚げするのが自分の実力に合っていると思っていたが、そんな事を声に出しては言えない。恐怖との戦いをいつもしているのであったが、登っている時はそんなのん気なことすら考える余裕はなくて、必死に登りきってしまうことばかりかんがえていた。

夕方、夕食を終えてトランシーバーで隊長と交信して明日の行動予定を打ち合わせする。高度障害を防ぐために毎日、荷揚げパーティとルート工作のパーティを入れ替えて行動していた。休養日はベースキャンプまで降りて休み、天気の悪い日には危険なルートでの行動はしなかった。よっちゃんは山猿と組み、隊長は由べえとペアを組み行動していた。

予想はしていたが五千七百からのルート工作がなかなか進まない。急峻な岩峰が出てきて登れそうにないのである。

隊長たちが五千七百から二百㍍ほど高度を稼ぎ帰幕して、「岩がもろく、かなりヤバイ」とよっちゃんたちに伝えて彼らは下って行った。

ベースキャンプからロープを担ぎ登ってきたよっちゃんと山猿が、翌日選手交代してルート工作をすることになった。今回の登山の核心部になるだろう。日程的に考えても、あと一週間で登らなくてはならない。

ルート工作に出る日、5時に起床して焼きソバを作って朝食を摂る。早々に食べて後片付けをして、タバコを吸って一息入れて、すぐにザイルやハーケンなどの用具、非常食などが入った非常装備、紅茶の入ったテルモス、ロープなどをリュックに詰め込み、テントを出てテントの入口をしっかり閉め、張り綱を点検して飛ばされないようにする。帰って来た時にテントがつぶれていたら大変なことになるからだ。

山猿がトップで登る。昨日ルート工作されているので五千九百㍍まで早く登りその上部のルートを少しでも延ばしたい思いであった。しかし、重いリックを担いでいる事や、初めて登る高度であるので、身体が順応しきれておらず、ハアハアと息をするのも辛いようなありさまであった。

それでもなんとか三時間ほどかけてルート工作の最終地点まで登った。手首に付けた高度計は五千九百を指している。この高度計は余り上等ではないので誤差はあるだろうが問題はない。

これからは未知なる領域に入るので緊張する。不安と言い知れぬ興奮がわいてくる。山猿に代わってよっちゃんがトップで登る。すぐに岩峰が稜線に現れ取り付いたが、一枚岩でハーケンが打てる割れ目が無いのである。ボルトを打つことも考えたが、こんな怖しいところで時間がかかるボルト打ちなんかしてたら時間がかかりすぎ無理だと判断した。結局、その日は諦めてロープをデポだけしてテントに下ることにした。

仏と共に 11

上原むつえ

きっとお釈迦様のお告げにちがいないと思い、大阪の吹田市を訪ねた。地元の人に聞いて釈迦ガ池に行き、近くのアパートを借りることにした。腰をすえて寺を建てる用地を探さねばならないと考えたからである。

仮住まいのアパートも決まり釈迦ガ池の辺りを散策していると、寒い夕暮れ時であった為か、数人の男達が焚き火を囲んでいた。近くに行くと、寒いから火にあたっていけと言う。見ず知らずの土地であったが、寒かったので火にあたらせてもらうことにした。

私は、この付近で土地を買いたい旨を男達に相談した。すると、ひとりがホントに買いたいのかと聞くので、スグにでも買いたいと答えた。するとその人は、今日はもう夜だ、話は明日にしよう、と言ったので、明日又きて話を進めることになった。

翌日、昨夜話をしていた人は近所の不動産屋さんであることがわかった。昨日、私が辺りで唯一更地で残っていた地面のことを聞くと、売ってもいいという話になったので、早速契約をしたのである。吹田へ来て〈

に二日目であった。トントン拍子に土地は手配できたのである。

私は、金が無かったので百坪余り土地を担保にして銀行から金を借りて買う事にした。不動産や金融のことは全く素人であったので、周りの人の言うとおりにしたのである。すると、土地代だけで一億かかった。銀行も女の私に簡単には貸してくれず困っていたら、親しい檀家さんが保障人になってくれ借りられることになった。

寺を建てるのは大変である。小さいながらも本堂を構える寺を作るのは金のかかる事業であったが、四国の南国市で再建したD寺の経験があったので数年を要して完成した。

宮大工が日本材を使って建てる寺は大変高い。普通の民家の十倍ぐらいすると思っていたらいいぐらいの金がかかるが、やはり後世に残るものだから恥じない建物にしたいと思った。

新しい寺であったので檀家が少なく、寺の維持費を賄っていくのが大変だとは思っていたが、借金の返済が始まって銀行からの返済明細通知書をみるとびっくりした。毎月の返済金額が80万円を超えている。こんな金額を返済し続けられない。考えあぐねて静岡の弟に相談した。弟は私が困っているのを見かねて銀行に全額返済をしてくれた。こうして寺を建てられたのである。

異聞・幻のストラディヴァリウス④

「あなたは、これ以上ここにいてはいけない」

遊び疲れたナターシャを、夕食後早々にベッドにつかせ、給仕や侍女は退出させて、ニコロと二人になったころ、マリーナは落ち着いた口調で、口を開いた。

マリーナの言葉はニコロにとって唐突ではなく、予期したものではあったが、その意味することはニコロの心に重く響いた。四年のあいだつづいた暮らしを終わらせなければならない。

四年のあいだ三人で暮らした日々は楽しさと歓びにあふれていた。

ニコロにとって経験したことのない自然とのふれ合いもあった。農園で土まみれになって汗を流しこともある。雨に打たれ、身体の芯まで冷えきって、高熱にうなされることもあった。

ニコロとマリーナとの激しいけんかもある。ニコロのヴァイオリンが奏でたパッセージや音の評価をめぐって激しく争うこともあったが、二人のあいだに決定的な亀裂を生むことはなかった。どちらかが折れ、性愛の営みのなかでわだかまりを解消させた。

ニコロにとっては、ヴァイオリニストとして大きく飛躍した歳月でもあった。この四年間は他に追随を許さない孤高の城にニコロをして達せしめた。それはマリーナなくしてありえなかった。

何かに憑かれたように、何時間も練習をつづけることもしばしばあった。夜遅くまでつづくこともある。これをつかみしめてしまわなければ、進むことも退くこともできないという、そんなさし迫ったような状況にあるニコロは荒々しい鬼神のようで、マリーナもナターシャも近づくことはできなかった。

ニコロはもがき苦しみ、やがて一つの山を乗りこえるのだが、そこからさらに高みへと一歩を踏み出すのである。こうして悪魔的といわれる超絶技巧を自分のものにした。

五歳年長の、愛人でもありパトロンでもあるマリーナとの別れは、避けようのない宿命なのだろうか。だとすれば、これ以上の滞在は別れをいっそうつらく苦しいものにするにちがいない。

ニコロは、もちろんマリーナやナターシャとともに暮らすことを望んでいたが、ニコロには、イタリアのみならず、ヨーロッパ各地を移動しながら演奏旅行をするというボヘミアンのような生活がまっている。農園を経営し、この地を離れることができないマリーナがニコロとともに暮らせるはずがなかった。

「ここにいてはいけない」というマリーナの言葉は、おぼろげだったヴァイオリニストとして生きる運命をはっきり自覚させた。

翌日の未明、ニコロは何もいわず、何も残さず、カノンとわずかばかりの身の回り品をたずさえて、マリーナのもとを去った。

＊

一八〇五年、ニコロ・パガニーニはふたたび公の場に姿をあらわす。まだ二十三歳という若さにもかかわらず、以前よりも増して上達したヴァイオリンの演奏技巧に聴衆は熱狂した。このとき、「パガニーニは失踪中に悪魔に身を売り、見返りにあの超絶技巧を手にしたのだ」と、まことしやかにうわさされるようになる。

イタリア各地をめぐって演奏旅行をつづけ、莫大な収入を得たニコロは、ふたたび賭博と女性との性愛におぼれ、退廃した生活に身をゆだねるようになっていった。

当時皇帝となって間もないナポレオンの妹たち、エリーザとパウリーヌとも浮き名を流した。

母そして姉

具志　清

謹啓　御元気の御様子何よりです。

貴女の微笑と言葉を思い浮かべております。

「唯、父が住んでいた場所が知りたかったのです」と言う言葉に、胸が打たれます。

お母様は、お父様のことを折りにふれ深く熱い想いで語っておられたでしょう。

「でも、中へお邪魔する気はありませんでした」と言う御心情、僭越ながら理解できます。

貴女は、その屋敷の門の前に立ち、聞き知っていたその名の表札を、懐かしい人に会ったような思いで、見ておられたでしょう。

龍安寺の石庭は御覧になりましたか。二日目はどこへ行かれましたか。

申し遅れましたが、小生、商事会社に勤めております。種々な物品を取り扱っております。小生、肩書きは営業部長となっていますが、書籍全般の販売を担当しております。主に宗教、学術関係の図書の販促のため、社寺、大学等を訪問しております。会社は四条烏丸近くのビルの中にあります。

あの日も商用で嵐山へ出向きました。阪急烏丸駅から桂駅乗り換えで嵐山へ至りますが、烏丸駅への途次、ひょっこりと旧友と出会い、数年振りなので喫茶店で久闊を叙しました。そのため予定より半時間ほど遅れました。

貴女とは、その旧友に時間を取られなかったら、お会い出来なかったかも知れません。小生はその男に感謝しなければいけませんね。

さて、この頃、京都も例年のこの時期より人出が増したようです。大阪万国博覧会の効果でしょうか。東京はどうですか。お仕事はお忙しくはありませんか。お躰には充分に御留意下さい。時間が取れましたら、また京都へお越し下さい。その時は御一報下されば、少しはお役に立てるかと存じます。お便りも、またお願いします。御両親の事もっとお聞かせ下さい。

あの戦争に青春の全てを捧げたお父様達の世代に、小生等、後の人間はいくら感謝したところで、今更詮無い事でしょうが、先輩達の想いを少しでも理解出来るように努めるべきです。小生は、終戦の時、小学校、当時は国民学校と称していましたが、六年生でした。小生等の世代にも戦火に巻き込まれ幼くして死んでいった者も大勢います。小生などは運よく生き延びてきました。それが負い目ではあります。

取り留めの無い事を書きましたが、これにて失礼します。またお会いできる日を楽しみにしております。　敬白

拝啓　あたたかいお手紙、ほんとにありがとうございます。母亡きあとは沈鬱な日を過ごしておりました。母の手元には父のノート類や手紙、葉書などが沢山残されております。父の最後の手紙は、書き移して送らせて頂きました。父が書き残したものを全部、幾度も読み返しております。

高井様とお会い出来たのはほんとに幸せでした。短い時間でしたが、わたしの京都への初めての旅に、ほんとにいい思い出が出来ました。お会いしていなければ、父と母の思い出の地を訪ね歩いたとしても、侘しい心のまま東京へ帰ったでしょう。また京都へ行きたいです。

あの日は天竜寺の石庭も拝観しました。とても有名ですので写真集などでは度々見てはいましたが、実際に観ますと、なんだかむっかしくてよく分かりませんでした。あの十数個の石の配置は、虎の子渡し、と言うのだそうですね。わたしにはそんなイメージは浮かびませんでした。でも、じっと観ていると、なにか考えないと悪いような気になるのですから、やはり名園なのでしょうね。わたし一生懸命考えました。でも哲学や芸術とは縁遠い俗な事しか考えませんでした。修養が足りないのですね。

山門から方丈へ至る間にある池とその周辺の景観が、わたしの感性にはよく合いました。枯淡な小さな公園の風趣があります。池のほとりをそぞろ歩きました。父と母の散歩道でした。翌日は、四条河原町界隈をぶらぶらしました。やはり京都の最大の繁華街ですね。冬の日でも賑やかですね。

母が働いていた喫茶店、その頃はカフェと言っていたそうです。探したのですが見あたりませんでした。寺町通り、と聞いていたのですが、それらしきお店はありませんでした。

新京極でお昼のお食事をしました。そして午後もぶらぶらしました。洋服に着替え、髪もおろしてうしろで束ねていましたので身軽になっておりました。

河原町通りの丸善へ入りました。父がよく利用した書店です。わたしは、梶井基次郎の作品で知りました。「檸檬」に出てきますね。

主人公の私は、画本の棚の前に立ち、幾冊か引き出して重ね、その上に、寺町二条の果物屋で買ってきた檸檬を置き残し、丸善を出て、それが大爆発するのを空想します。作者自身の心象を表白した小説ですね。わたし、高校一年の時、この短編小説を読んだのですが、書き出しの「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけている」にすごく共感しました。わたしも梶井基次郎の真似をして画集の書架へ

の前に立ってみました。

黒田清輝の画集がありました。「湖畔」を見ました。解説によると、モデルは黒田夫人ですね。二十三歳の時だったそうです。ほんとに清楚な美しい方です。わたしなど、とてもとても。でも、母の若い時分の写真が数葉ありますが、母に少しは似ているかな、と思いました。各階のフロアをぶらぶらし、婦人用の万年筆をひとつ買っただけで外に出ました。今、その万年筆で書いております。

丸善の横の小路を東へぶらぶらしている中に、高瀬川に行き当たりました。小橋のたもとに小さな瀟洒な二階建がありました。「みゅーず」という名の名曲喫茶でした。一階は別の喫茶店で、道端から直接二階へ上りました。

天井も壁も木造りでした。丸木も板も薄黒の塗料がしてあり、山小屋のような風情がありました。室内は照明も柔らかくその名にふさわしい雰囲気でした。一時間ほど珈琲を味わいつつクラシックを聴きながら、父と母を偲びました。

父は、戦争中、官憲の監視下にありました。理科系の学生でしたが、文科系の学生、また他大学の学生とも交わり、革新思想の研究会などに参加していました。仲間たちと度々検挙され幾度も留置されました。ある時、「適性音楽ばかり聴きやがって！」と殴られました。「ベートウベンですよ」と返すと、「それがどうした！」「ドイツ人じゃないですか」「この野郎！、屁理屈ぬかしやがって！」とまた殴られました。母は、こんな理不尽なエピソードになると、笑いながら話していました。ドイツは同盟国ですものね。母自身、父との付き合いのため、睨まれていました。再三出頭を命ぜられ訊問を受けました。

父は昭和十八年十二月から翌年の一月末にかけて留置されました。母はその間差し入れを続けました。多くの学生は秋頃から各地へ送られていましたが、父や一部の学生は後になりました。父を釈放したのは戦地へ送るためでした。

母はその夏、ふるさとの山奥で、ひっそりと、わたしを生みました。生まれてひと月もたってから、祖父はわたしを、自分の次女として村役場へ届けました。母にとっても、祖父にとっても、また、祖母にとっても、他にすべはなく、苦渋の選択でした。

ですから私の母は、母そして姉、なのです。恥知らずにもこんな事まで書いてしまいました。お笑い下さい。

暑さが厳しくなって参ります。御健康にお気をつけて御励み下さい。

かしこ

携帯エッセイ27

「日記続編」

日記を付けだすと題材を探す様になった。先日、こんなことがあった。行き着けのパン屋に『ピノキオ』と言う店がある。今までは特にその屋号を気にしたことはなかった。しかし、書く材料にしようと思って由来を聞いた。

「どういう意味？」

若い女性店員だった。

「すみません。知りませんので聞いて置きます」と言った。

後日、行くと「分かりました。ピノキオは嘘をつくと鼻が伸びます。私ども鼻が伸びない様に正直な気持ちでパンを作ろうと言う願いだそうです」

私は「へえ、『ピノキオ』ってそんな話だったかな？ ありがとう」と礼を言った。

気掛かりなので本を買いに行った。しかし、古典は容易に手には入らない。アマゾンで買おうとパソコンを触り出したが、面倒で途中で止めてしまった。仕方なくレンタルビデオを借りてディズニーの動画を見た。

確かにピノキオは嘘をつくと鼻が伸びた。人形でも鼻が高々になるのは良くないんだな、とこじつけて納得した。もう一つ、コウロギが女神に命じられてピノキオの『良心』としていつもそばに付き添っているのが発見だった。著者のガロディの人間性を思いやった。

日記を書くことでピノキオを再発見出来た。日記は人生を豊かにしてくれそうだ。《龍》

俳句

土田　裕

○ 変わりなき悪筆もあり年賀状

○ 三が日和服で居りし日の遠く

○ 電線に孤高からすの初景色

○ 参道の杉の大樹にある淑気

○ 花かつおふはりと浮かべ京雑煮

直子

○ 駅員の冬陽を返す金釦

○ 御城下に機屋の名残り冬うらら

義兄とその家族（13）

義兄がガンを宣告されて1年半、この間、義兄が会社に顔を出したのは1、2回。1回目は、2万1千円也のお見舞いをもらって帰ってきた。同僚の皆さんが一人3千円ずつ出してくれたとかで端数ありのお見舞い。ふつう、上司とかが「端数はおかしいだろう、私が出すから3万円にして渡してあげよう」とか言うもんじゃないかと思うが。まあ、そんなあったかい仕打ちは期待できない会社というか、義兄の生きざまというか。

何しろ、会社はまだクビになっていないのに、この1年半、会社の人が見舞いに来てくれたのは、たった1回。姉の話では、四国の病院に入院したばかりのとき、4、5人が一度に来てくれて、「どうですか」といかにも様子を見に来た感じで、さーっと帰っていかれたそうで、それっきり。

09年7月に発病して、9月には大阪の病院に転院したので、四国の人たちとすれば「大阪まではお見舞いに行けない」ということだとは思うが、「その後、どうか?」という電話の1本もくれていないという。四国に転勤する前、義兄は、ずっと大阪で仕事をしていたので、噂か何かで聞いて、大阪の元同僚の人たちが1回ぐらい見舞ってくれてもよさそうなものだが、それもなし。ま、いいんですけどね。そういうつきあいしかしてもらえない方に問題があると思うし。実際、義兄は神経質そうに見え、お世辞とかも言えないし、東北出身のせいで大阪弁にもなじめず、もともと口数も多い方ではないので、何となく暗い印象がある。人気者というタイプでは残念ながらないのだ。

しかし、家族としての義兄はとてもいいやつだ。ちっとも笑えない冗談を言ってみたり、義兄なりに私たちを楽しませてくれようというサービス精神は旺盛で、たとえば、私が義兄の家に電話して、「ねえちゃん、いてますか」と聞くと、「うちのキティちゃんなら、いま、お風呂入ってま～す」などと言う。恥ずかしながら、姉は昔からキティちゃんが大好きで、家のなかにはあの白いネコのキャラクター・グッズがあちこちに置いてある、中高年に多い「キティラー」なのだ。姉に言わせると、「私を呼ぶときは、グティちゃんと言いよるけどな（笑）」。まあ、私も姉の呼び方として、そっちの方が納得できるが、ともあれ、姉と義兄が仲良くしてくれているのは妹として安心するというか、心強い。

なにしろ、姉は突飛な性格なので、いつ離婚するかわからない、みたいなことを「爆弾みたいな子やから」といって心配している。

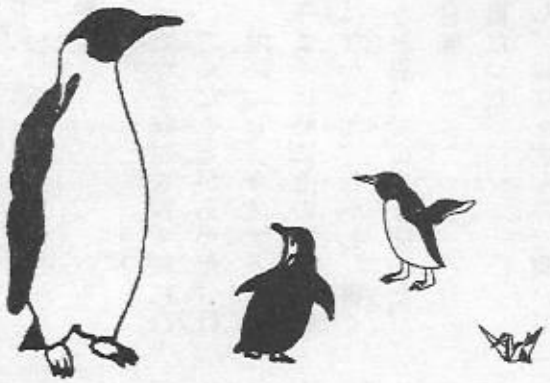
20代のとき、姉は、義兄の住んでいた東北に嫁いだのだが、生後半年の赤子を連れて、「もう別れる！」と言って大阪に帰ってきたという過去がある。幸い、義兄が飛んで迎えに来て、うちの父、当時は生きていたので、その父が「○○くん、さぞかし、来にくかったやろうに、よう迎えに来たってくれた！　ありがとう」と頭を下げていた。そして、そのまま姉は東北には帰らず、義兄が大阪で暮すようになった。家は別だが、「マスオさん」みたいになってくれたのだ。

近所に住む弟一家にも（もちろん姉と私の弟だ）とってもよくしてくれる。甥たちの遊び相手になってくれ（義兄の趣味が鉄道模型なので、鉄道マニアの弟の息子Aは子分のようなものだ）、不器用でメカに弱い弟に代わって、義妹のためにカーテンのレール付けでもパソコンやビデオの接続でも、何でも気軽に黙々とやってくれる。まだ十分に使える何十万もしたというカメラをあっさりと「新しいのを買うから」と弟の息子Bにやってしまったこともある。カメラには愛着もあるだろうし、新しいモノを買っても前のを手元に置いておく人は多いのに、義兄は甥っ子を喜ばせたかったのだ。

そんな義兄だから、たとえ会社の人も友人も（そもそも、いないみたいだ）、義兄の東北の身内も誰もお見舞に来てくれなくったっていいのだ、私たち家族で大切にする。

姉は言う。「本気で、心配してくれたん、アンタ（妹）とシンちゃん（弟）だけやったなあ。息子もあきまへんわな。『お父さん、最期かもしれへんで。できる限り、見舞ったげてや。でないと、アンタが後悔するで』とまで言うたのに、病院にもほとんど来まへんでしたわな」。姉はわざと極端な大阪弁でグチるが、それは傷ついているということだ。姉は照れているときも、極端な大阪弁になるのだが。

「しかもやで、言うにことかいて、お母さん一人になったら、この家、どうするのん、一緒に住もか、やて」。義兄の病気以来、姉は息子夫婦にやたく



ぐらと疑心暗鬼になっていて、正直、その悪口も結構、ブラックで笑えるのだが、ま、それはおいておくとして、義兄の会社の話に戻そう。

義兄は、四国に転勤になるずっと前から、リストラ対象だったようだ。姉いわく、「定年前に四国に転勤させられたんはな、『辞めるんやったら、辞めて下さい』ということやろ。別に辞めてもよかってんけど、私言うたってん（自分のダンナに、だ）。『面白いやん、行くって言うたり（会社に、だ）。私も一緒に行くわ、四国』」。

専業主婦だから、そういう点、姉は身軽だ。義兄と姉は四国・松山に引っ越し、会社のお金で広くはないが快適なマンションを借りて、何やら上機嫌で四国ライフを満喫していた。少なくとも、姉はそうだった。

「四国はええでえ。温泉だらけやねん。私ら毎日、夕方になったら、家から5分ぐらいのとこにある温泉に入って、家のお風呂なんか入ったことないねんで。土曜とか日曜は車でちょっと走ったら、景色のええとこに温泉あんねんもん、アンタも遊びにきいや！」。

リストラされる心配があるにしても、大きな会社っていい。とくに義兄は技術職だから、仕事先（医療機器の修理なので仕事先は病院だ）に直接行って帰れるので、オフィスの窓際に手持ちぶさたに座っていて、日がな1日、ボーっとしていなくてはならない、ということはないようで、結構、えらそうに「じゃあ、今日は、どこそこの病院にいるから」と連絡だけして、直行直帰の日々。出世から遠くはなれていても、じゃなくて、リストラ対象でも給料は悪くない。

実際、ガンになって1日も出社していないのに、夏のボーナスももらえたそうで、その金額を聞いて驚いた。130万円。うそやろ！である。姉が貧乏になると、妹として放っておけないし、不憫だし、病人を抱えている分、こっちも辛いから、ありがたいのだが、それにしても会社に行かなくても、ボーナスってもらえるのね、大きな会社って。

でも、その会社の人は、「どうですか」とか「いつごろ復帰できそうか」とか、一切、何も聞いてくれないらしい。らしい、というのは、姉がそう言っているからで、義兄に聞けば、義兄は正直だから「パソコンのメールでも一回も聞かれてないよ」とか教えてくれるだろうが、それではあんまり気の毒だ。少なくとも、1月に退院してから1年、自宅療養中だが、会社の人が、義兄の家を訪ねてくれたことは一度もない。

経理とか総務の人が、事務的なことで問い合わせてくることもないらしい。「アウトソーシングっていうらしいねんけど、給料計算とかは別の会社がやってんねん。その会社は海外にあって、たしかシンガポールとかいうてたわ」と姉。つまり、義兄は正社員の席のある、番号か何かなのだ。会社に出ていなくても、権利があるうちは、給料だか傷病手当だかはきちんと振り込まれるし、ボーナスだってもらえる。

中小企業ではこうはいかないだろうけど、「○○くん、どうや、具合は？まだ君は若いんや、頑張らんとあかんで」と言ってくれるおっちゃんの一人や二人はいるような気がする。義兄の会社には、人情もぬくもりもない、なさすぎる。そんな会社に何十年も勤めたら、ガンにもなろうってもんだ。しかし、姉にはそんな感傷はない。みじんもない。「見舞いになんか来られたら、私、いややもん！　ちょうど、ええねん」としゃあしゃあと言う。

義兄が、発病してから二度目に会社に顔を出すことになった時、姉はこう言って送りだした。「もう大丈夫です、みたいなこと絶対、言うたらあかんで。会社に出て来いといわれたらあかんから。具合、悪そうに言うときや」。最近の兄はピンピンしている。会社も会社なのだが、うちの姉も姉なんである。

（つづく）

男色

茶会の心得である「一期一会」という言葉は、今では広告のコピーにつかわれたり、日常会話で耳にするほど、広くつかわれている。

初出は利休の弟子宗二が記した『山上宗二記』であるが、茶湯の極意として強調したのは、井伊直弼である。彼の著『茶の湯一会集』に「茶湯の交会は、一期一会といいて……一世一度の会なり……主人は万事に心を配り、聊かも麁末なきよう深切実意を尽くし」とあるように、主が客に対するとき、この交会が今生の最後であるという心がまえで意を尽くさなくてはならない、けっしてなおざりに催してはならない、というのが一期一会である。

一期一会は、茶会を終えて客が去るまでのことだけではない。むしろ客と別れてからが肝要である。茶席にもどり、いままで相対していた客に思いをいたすのである。ひたすら客の安寧を祈るのである。

その心情は恋といってもいいかもしれない。『葉隠』の忍ぶ恋に通底しているのではないかと思う。

『葉隠』のなかで山本常朝が語る「恋」は男女間の恋愛ではない。念人あるいは念友といわれる男に注ぐ愛情である。女性との関係は、家を維持するための子孫づくりにある。献身的な無上の愛情は男にむかう。男色の道である。

連載　女８０年の軌跡　眞粧さん

人は「独り」ではない

「老いてまだ恋しきもののひとつあり　夫おればこその塩味」

この歌は思いを込める日記のような一面をもっています。日々の暮らしの中で通り過ぎてゆく無数の思いを真空パックにしてしまうのです。

さあ新しい年を迎えて、うしろを振り向かないように「自分独りだけ」という事は絶対にないからです。

いろんなニュースが入ってきます。きびしい現実に向かって努力し、誠心誠意がんばっている人もたくさんあります。いろんな壁にぶつかる事もあります。そんな時、誰かに出会い解決したという経験もあるでしょう。

一人で生きているのではないという事と、お互いに助け合って縁のあるところで人のためになる事も、自分自身を高めていく助けになるのかな、と感じます。

反省から出発し、生き甲斐のある人生を送りたいし、そして人生道で「がんばったね」と言われるような生き方を探したいと念じています。

おたがいに半歩さがる

或る夫婦から離婚の相談を受けた事があります。双方から話を聞き、「それぞれに、自己主張ばかりするのではなく、おたがいに半歩さがるように言って下さい」といいますと、奥さんから、

「主人に半歩さがるように言って下さい」

と。ご主人はしばらく考えてから

「うん。そうですね」

といって、奥さんに半歩ゆずったようです。

その後の話し合いで離婚を踏みとどまったのか、平気で私の前をしゃべりながら歩いてゆくのです。お互いに半歩さがる、というアドバイスが役に立ったのかどうかは、二人揃って歩いている姿が物語っています。

他人事でなく、つい自分の考えばかりを主張してしまいがちですが、半歩さがる気持ちになれば、そこから思いやりの言葉が生まれるのだなあ、と私は素直に受け止めた次第です。

ストレス

ストレスが心の凝りであることを思えば、まんざら意味の通らぬことでもない。

心の塊は、肩のようにもんでほぐれないのがつらい。

「ウンウンわかる、その気持ち」と聞いてくれるけれども、答えは出ない。こうすれば、このように心を切り替えては、とまでは言ってくれるのだけれど。

でも自分がとりあげてまではいかない。じっくり聞く。そして暗いトンネルの中に一つの光が入ってくる事を望んで歩いて行くべし、という。口が一つで、耳が二つというのは、しゃべるよりは二倍話を聞くということだろう、と。

「酒と泪と男と女」の歌詞にもあるが、男は、自分にとって都合の悪いこと、忘れてしまいたいことやどうしようもない寂しさに包まれたとき、酒を飲むのでしょう。酔いつぶれて寝てしまうまで飲みつづける。

女の場合はそんなとき、ひたすら泣いて、泣いて、心をかきむしるように泣いて、涙が枯れはてるまで泣いて、やがて、静かにねむる。

でも女性のほうが長生き。

百歳以上の八割が女性とは、これ如何に。

『人気のデザイン』
6
キルティングベスト
＊
着物地にキルト綿の裏地を付けると軽くて暖かいと好評です

着物から服を仕立てます

梵～ぼん～

編集後記

謹賀新年

本年もよろしくお願い申しあげます。

読者の方、ご友人、どなたも投稿を希望される方は、お気軽に原稿をお送り下さい。原稿料は払えませんが、掲載させて頂きます。皆さんのご協力をよろしくお願いします。

＊お知らせ

２月13日（日）昼から

芥川商店街に隣接する「芥川商協会館」で、芥川だよりの初の懇親会を行ないます。これまでの芥川だよりを話題に楽しい時間を過ごしたいと計画しております。皆さん、お気軽にご参加ください。無料です。

２、３人くらいしかお集まりいただけないかもしれないと心配しておりましたが１０人くらいにはなりそうです。遠くから来られる方もいらっしゃいます。（嘉）